

# 天塩川水系サンルダムの投資効果を問い直す(上)

ルライター 滝川 康治

# 地域は「見果てぬ夢」を再びダムに託すのがー

## 観光開発の夢不発 岩尾内ダムの教訓

サンルダム計画がある上川管内下川町の南隣に位置する、人口三千人弱の農林業が基幹産業の朝日町。天塩川水系では初めて、国直轄の岩尾内ダム(総貯水量1億770万トン)がこの町に完成したのは、今から三十年前の一九七一年のことである。

市街地から十数キロほど行ったダム湖のほとりに町内の有志が出資して観光ホテルを建てたが、営業不振で数年前に廃業し、跡地は更地のままになっている。道道沿いにあった一軒のドライブインも営業をやめた。使用料を徴収しないので夏場にはキャンプ場がに



岩尾内ダムが完成したころ、地元自治体などは観光や地域振興に大きな期待を寄せた。完成から30年たったが、湖畔のホテルは取り壊され、ドライブインも廃業した(写真左)

北海道開発局が上川管内下川町で進めている「天塩川水系サンルダム建設事業」は、住民生活の向上に役立つ、投資効果のある公共事業なのか。観光や地域振興の起爆剤にしようと大きな期待を寄せたが、見果てぬ夢に終わった朝日町の岩尾内ダムの例を見ながら、その投資効果を検証してみた。

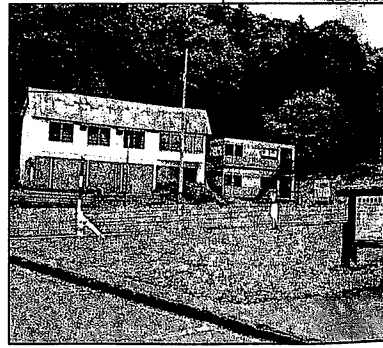
設予定はない、という。

町はダム湖周辺の維持管理費として年間千三百万円ほどを支出してきたが、今後は新たに管理棟の維持費や職員の人件費も必要になってくる。キャンプ場の利用者にはありがたい施設ではあっても、地元にとってはさほど経済効果は期待できないようだ。何とも涙くましい努力というべきか……。

## 過疎化に拍車かけて 乏しい住民の充足感

わたしの手元に岩尾内ダムの実施設計が始まった一九六四年の「北海道新聞」地方版の記事がある。

ダムを中心に東西南北に幹線道路が延びることで産業や観光の分岐点となる。冬は大スキー場や温泉、夏はキャンプ場や酪農園を併せ、朱鞠内湖と紋別港を結ぶ大きな観光コースをつくる構想がある。そうすれば「観光朝日」にかなりの財源をもたらす。ダムの目的に「農業用水の確保」があるの



で、新規開田が進んで黄金の美田が広がり、農家経済は安定ムード。ダムサイト付近は有力な観光資源で、各地からくる観光客がひきまきらない。

ざっと、このような内容である。今ならこんな能天気なことを書く記者はいないだろうが、当時の地域社会は「ダム礼賛」一色に染まっていた。

着上した六六年には、同じ道新に首長たちの座談会の記事が載った。

隣の土別市(当時の人口は3・7万人ほど)の市長は「かんがい排水事業が行き渡り、周辺地帯は飛躍的に伸びる。市街地人口も膨張して七万人、士別を中心に豊かな町になるだろう」と語り、和寒町長が「企業誘致で人口五割増、塩狩にはサラリーマンの一大住宅地ができる」と応じた。「ダム建設

を契機に地域開発が進む」と本気で信じられていた時代であった。

その後の状況はといえば、美田は減反で畑地化が進み、農家経済は安定ムードとはほど遠い。「観光朝日」の現実、冒頭にもたとおりである。

岩尾内ダムは、地元自治体などが一九五〇年代に始めた誘致運動の末に建設が決まっている。わたしは朝日町議会のダム対策委員長を務めた人物に会ったことがあるが、その人が運動初期に全国各地のダム予定地を訪れたところ、いずこも先祖伝来の土地を水没させることに反対しており、地元みずから誘致していたのは朝日町くらいだった、と述懐していた。

映画の自殺シーンのロケ地になったことがある、寂しげなダム湖畔。ここに、かつて百七十戸あまりの集落があったことを知る人は少ない。

朝日町の人口は、ダム着工前の六五年に六千人あまりだったが、水没地区と奥の集落を合わせて千人ほどの住民が土地を離れ、多くの人が町を出た。「ダムで一気に過疎化が進んだ」と住民たちは口をそろえる。その結果、ダム完成後の七五年には三千七百人台へ

